

灯を絶やすな！

—神島地区の伝統行事—

かわかんじょう



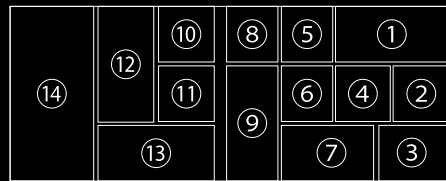
明治以前から続く伝統行事。戦争への出兵時以外は常に携わってきた。子どもたちが、地区の人たちと一緒に文化を学ぶことができる。それが何よりうれしい。

保存会統括指導員 菊地直美



「想い」はひとつ。この地に育った者として、この伝統行事を継承していきたい。

保存会会長 菊池敏秋



今の時代、子どもと大人が触れ合う貴重な機会。幻想的に流れるイカダを見ると「やってよかった」との思いが。

神島子ども会会長(写真中央) 日吉正人

- 掲載写真**
- ① 子どもから大人まで、一丸となって行う『かわかんじょう』制作。
 - ② 竹を軸に松明作り。
 - ③ 縄を編み込み綱を作るのは子どもたちの仕事。
 - ④ 藁と竹を使い作る本体。
 - ⑤ 竹を針に、綱を糸代わりに、藁を本体に縫い込む。
 - ⑥ 本体が狩野川に入水。
 - ⑦ 最後に松明を本体中央に建て、かわかんじょうは完成。
 - ⑧ 松明に灯をともし。
 - ⑨ 勇む「乗り手」と関係者たち。
 - ⑩ 子ども制作のイカダ。
 - ⑪ 出発を見守る観衆。
 - ⑫ 乗り手と橋の上の子どもたちが声を掛け合う。
 - ⑬ 「う、う、うわはい」「う、う、うわはい」
 - ⑭ 幻想的に流れるイカダを月明かりが優しく照らし、古より伝わる伝統の灯は、絶やされることなくこれからも継承されていく。

神島のかわかんじょう

毎年8月1日夕刻、神島地区の狩野川で行われる夏の風物詩。暴れ川である「狩野川」の水霊を鎮め、水難者の供養や地区の安全を祈願するという、明治以前から続くと言われている伝統行事です。

当日の朝、神島地区は活気に溢れます。子どもから大人まで、一丸となって準備を行います。

およそ3m四方の竹枠に麦わらを敷き詰め、厚さ1mほどのイカダを作りまします。この中心に、高さ5m〜6m以上にもなる松明を立て完成。こうしてできあがったものが、いわゆる『かわかんじょう』と呼ばれるものです。

陽が沈むころ、かわかんじょうの松明に火を灯します。10人ほどの若者がこれを操り、「う、う、うわはい」と囃したてます。すると、川岸にいる子どもたちはこれを受けて、「う、う、うわはい」と同じように応えます。これを繰り返し続けながら、神島橋付近までの400〜500mを流します。